

**砺波総合病院**  
から

検診センター  
所長 瀧 鈴佳

市立砺波総合病院  
☎32-3320

病院のホームページもご覧ください。

## 乳がん検診と 超音波検査について

現在の乳がん検診は

マンモグラフィー検診

日本人は、40歳を過ぎると乳癌にかかる人が増えはじめ、40歳代後半が罹患のピーク年齢となります。このため日本では、厚生労働省が策定した乳がん検診のガイドラインにもとづいて、40歳以上の女性に、原則としてマンモグラフィーによる検診を2年に1度受けるよう提言しています。マンモグラフィーは、現段階で乳癌死亡率の減少という結果が証明されている唯一の検査です。

マンモグラフィーで乳癌が見つかりにくい「高濃度乳腺」とは

ただ、同じようにマンモグラフィーで検査しても、乳癌が見つかりやすい人とそうでない人がいます。この見つけやすさを左右するのが、「乳腺濃度（または乳腺密度）」というものです。

乳房の内部は、主に脂肪と乳腺組織からできていて、乳腺組織が多く存在している状態を「乳腺濃度が高い」といいます。

脂肪の割合が高い、つまり乳腺濃度の低い人では、全体に黒っぽく写るため、乳がんである腫瘍（しこり）が見つけやすいのですが、乳腺濃度の高い人の画像はほとんど真っ白です。マンモグラフィーでは、乳腺組織も腫瘍（しこり）も共に白く写るため、乳腺濃度の高い人ほど乳癌を見つげにくくなるのです。

一般に乳腺濃度は若年者ほど高く、年齢とともに低くなっていきますので、通常40歳を過ぎればマンモグラフィーで病変は見つけやすくなります。しかし、日本人は乳腺濃度の高い人の比率が高く、高齢でも乳腺濃度が高いままの人が少なくありません。現状では、検診のマンモグラフィーで判別困難でも「異常なし」と通知されることが多く、見落としにつながりかねないことが問題視されていました。

高濃度乳腺の人には超音波検査を

一方、超音波検査では乳腺組織は白く、癌である腫瘍（しこり）は黒く描出されるため、高濃度乳腺の人でも識別が可能です。しかし乳癌だけでなく治療の必要のない良性の病変も拾い上げるため、その区別に注意を要します。また、マンモグラフィーで確認できる微細な石灰化は発見できない場合があるというデメリットもあります。

現在、日本乳癌検診学会を中心とした作業部会で、マンモグラフィー検診で高濃度乳腺であった人に、超音波検査を取り入れる体制を整備するための検討が行われています。

見落としのない高い技術をもった検査技師や医師の充足、癌と治療の必要のない病変の判別などが今後の課題です。

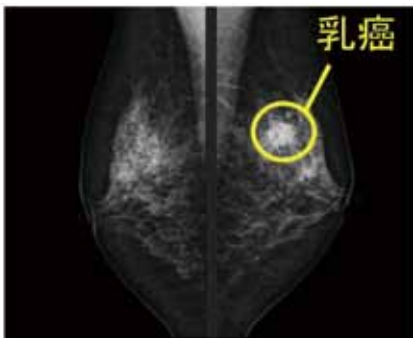


砺波市の乳がん検診で  
超音波検査を受けるには

市立砺波総合病院の健診センターでは、砺波市乳がん検診の施設検診を受託しており、オプションで乳腺の超音波検査も行っています。主に50歳未満の若い方や、以前に乳腺の病気を指摘された方にお勧めです。

砺波市の乳がん検診を受ける方で、超音波検査も希望される人は、申し込みの際に、超音波希望とお伝え下さい。

乳腺濃度が低い人のマンモグラフィー



乳腺濃度が高い人のマンモグラフィー

